

「朝刊・夕刊」 いや 「昼刊」

宮崎県N I E推進協議会会長

飛田 洋

皆さんに聞きたい、生まれて初めて新聞を読んだのは何歳のときだったか。私自身は、何歳で新聞を読み始めたか、いつ新聞を初めて読んだかの記憶は定かではない。しかし、物心ついたときから新聞が日常として自宅にあったことや、新聞インクに「田舎の自然にはない別世界とつながるような刺激的なかおり」を感じたことを鮮明に覚えている。

実家は田舎にあり、しかも町の中心から4kmほど離れていた。そこには新聞が宅配されず、郵便配達時に、帯封で包んだ新聞が、毎日昼頃「昼刊」として届いていた。この「昼刊」の新聞、それを祖父がまず読む、そして祖母や父さらには母が裸電球の下で食い入るように読む。その姿が印象深く、新聞は何より貴重なものだと幼少時に刷り込まれた。それが、私と新聞の出会いである。

田舎の農家である実家、本がそうたくさんある家庭ではなかった。いやほとんどなかった。そのなかで、雑誌「家の光」と郵便屋さんが配達する「新聞」こそが、社会の光りさす窓であった。ところで、新聞は今も若者にとって光さす窓であろうか。

日本新聞協会の2018年のデータによれば、本県の新聞発行数は朝・夕両紙を併せて328,501部で、それを本県世帯数519,808世帯で除すると、1世帯あたり0.63部の購読割合である。新聞は事業所等での購読もあり、また、複数紙購読の家庭もあることを考えると、「本県では半分近くの家が新聞を購読しない時代となっている」と思われる。

平成28年のことであるが、県立美術館改革の参考意見を伺うために全国の美術専門家に宮崎に来ていただき「宮崎県立美術館のこれからを語る会」を開催した。その折に、全国美術館会議の副会長から、次のような紹介があった。要点のみ紹介する。

世界の美術館長を4人または5人我が国に招聘し「21世紀ミュージアムサミット」を10年ぐらい前から神奈川で実施している。その会議で印象的だったのが、アムステルダム国立美術館からの発言で、その美術館では、60年も前から毎年の入館者にアンケートを取って保存してきており、それをもとに調べた結果、同美術館に来ている大人の大半は、子どもの時代に美術館に来た楽しい思い出をもっていることが分かった。子どものときにそのような経験があると、必ず大人になったら自ら美術館に来る。だから、美術館としては、子どもたちを大事にすることがとりわけ大切である。

ヒトは身体能力的には、野生生物の中で特に優れた存在ではない。しかし、生態系の中で最上位ともいえるような状態で地球上に存在してきている。なぜそのことが可能か。それは生物種ヒトのみの特長、生物種で恐らく唯一祖父母が子育てに参加していること、子ども時代が他生物に比較し極端に長いこと、それらの特長が人類に文化の継承を可能とさせ、誕生時の「野生生物ヒト」を成年期の「社会的生物人間」とすることができているからではないか。

幼少時代や青春時代に慣れ親しんだことが一生の習慣の基礎となる。若い時代に活字に親しまないで、大人になって活字に親しむようになるだろうか。インターネットなど多様なメディアがある時代だが、若き時代に触れたメディアが、その人にとっての一生のメディアとなるに違いない。その親しむメディア、大切にしたいメディアに新聞は選ばれるであろうか。今まさにそのことが問われている。

本冊子は、宮崎の志高き仲間たちの熱い実践記録である。本冊子が、これからN I Eに取り組もうとする方々の背中を押し、その道しるべともなり、宮崎のN I Eの実践の進化・深化に寄与することを願ってやまない。